

平和をつなぐ 平戸に残る戦争の跡

8月15日、日本は75回目の終戦記念日を迎えます。戦争を知らない世代の人にとっては遠い昔の話のように聞こえるかもしれませんが、平戸からも多くの人が故郷を守るために戦争に行き、尊い命が失われました。平戸に残る戦争の跡から平和について考えてみましょう。

一変した学校生活

大正14年に「陸軍現役将校学校配置令」が出され、「教練教授要目」が制定されると、全国の中学校・師範学校・専門学校では「軍事教練」が授業の時間割に組み込まれました。中学猶興館（現在の猶興館高校）には2人の将校が配属され「軍事教練」が毎日行われました。軍事教練には隊列行進、グライダー訓練、射撃訓練などがありました。また、野



外演習・発火演習では、制帽に制服

ゲートル巻きに銃を携行した軍隊装備で野山を駆け巡り、実戦さながらの訓練も行われました。

配属された将校は、軍事教練のみならず、学校教育に対しても軍の威光で強い強制力、指導力を持っていました。

日の丸の国旗を振って

出征兵士が平戸港から出ていくた

び、中学猶興館と平戸高等女学校の生徒たちが合同で見送りました。

最初のころは、平戸港に向かって先頭に校旗を掲げた中学猶興館生の隊列がラッパ担当の生徒のラッパの音に合わせて行進。その後ろに女学校生の隊列が続いて行進し、見送りました。

しかし、戦争が激しくなるにつれ、出征兵士が次々と出ていくので、そのたびに港まで見送りに行くことができなくなり、校庭から船に向かって国旗や手を振るといった形になっていきました。

黒く塗られた「白亜の学舎」

昭和17年4月のアメリカB25爆撃機の日本本土初空襲から、戦況の悪化の中でB29爆撃機の空襲が全国的に行われました。

中学猶興館の校舎は、日増しに激しくなる米軍爆撃機の攻撃の目標になるのを避けるため、昭和19年に黒色のペンキで塗装されました。当時、生徒動員で3年生から5年生の教室が空いており、1・2年生の授業は2・3階で行われていました。1階には陸軍敵前上陸部隊「曙部隊」が駐屯しており、校門には銃を持った



2



3

1_出征兵士が乗る船に向かって手を振る女学校生たち(平戸高等女学校卒業アルバム)、2_昭和8年ごろの射撃訓練(中学猶興館卒業アルバム)、3_中学猶興館生の軍事教練の服装、4_黒ペンキで塗られた中学猶興館校舎(中学猶興館卒業アルバム)



4

陸軍の兵士が立ち、学校前の白浜海岸には数隻の上陸用舟艇が係留されていました。

校舎の黒ペンキは、昭和44年に長崎国体相撲競技大会が平戸市営相撲場で行われるにあたり、天皇が校舎の前を通過することから、白浜海岸側のみ白ペンキで塗装しなおされました。校舎の裏側は、本校舎が解体される昭和61年まで黒ペンキが残っていました。



中学猶興館生の運動場での隊列行進の様子。(中学猶興館卒業アルバムより)



くが こういち
久家 幸一さん
(戸石川町)

「戦争の犠牲者にならないために 歴史を学ぶことが大切」

中学3年生の時に、昭和19年10月から報国隊として、長崎三菱造船所に動員され、マル四艇の工作に従事しました。マル四艇は工作船名で、海を震わすという意味で震洋とも呼ばれました。このマル四艇は船尾に自動車のエンジン、船首に爆薬を積み敵の軍艦に体当たりする、ベニヤでできたボートです。

昭和20年6月に沖縄戦が終わり、7月になり本土への空襲が激しくなりました。造船所も空襲を受けましたが、休みであったため被害は受けませんでした。このころはマル四艇も製造されなくなり、中学猶興館の生徒は川棚海軍工廠に

配転となったため、7月31日に一時帰省しました。平戸でも、警戒警報、空襲警報が出され、アメリカ軍の戦闘機が上空を旋回していました。8月9日に、学校で川棚行きの日行会があり、その帰りに友人の家に立ち寄りラジオで長崎に新型爆弾が落とされたと流れているのを聞きました。後になって、それが原子爆弾であったことを知りました。

川棚では、地下工場の穴を掘る作業に従事しました。8月15日は終戦の玉音放送を聞くことなく、宿舎に帰る途中で日本が戦争に負けたという話を聞きました。そのときは、日本の将来について考える余裕も悲壮感もなく、ただ家に帰れるという喜びがありました。私は、幸いにも空襲や原爆の被害を受けず、平和の大切さを痛感しています。戦争の犠牲者にならないために、歴史を学ぶことが大切だと思います。



平戸高等女学校の卒業式。学校ではなく動員先の川棚海軍工廠本部前で行われた(同窓会誌より)



中学猶興館報国隊(学徒動員生徒)の三菱造船分遣隊出動旗(猶興資料館蔵)

所で働いていた中学猶興館生徒たちは、川棚海軍工廠へ配転になりました。その理由として、特攻艇の製造が物資不足のため減少したこと、引率の教師が次々と兵隊に召集され、生徒の管理・監督が困難になり、平戸高等女学校の教師に引率を兼務してもらったためだったと言われています。その後、9日に長崎市に原子爆弾が投下され、約7万4千人の命が奪われました。

中学猶興館の生徒たちは配転命令によって奇跡的に被ばくを逃れ、学徒動員での被ばく死はありませんでした。

しかし、忘れてならないのは原子爆弾の犠牲者の中には長崎市で働き暮らしていた平戸出身の人もいたと

授業も受けられず働く日々

平戸高等女学校の生徒は学徒動員で働いた人以外にも勤労動員に駆り出された人もいました。動員先は、家族が出兵し人手が不足している農家や学校下の魚肉缶詰工場でした。農家の手伝いでは、牛を利用して田畑を耕し、田植え、稲刈りなどの重労働をこなさなければなりません。当時の学生たちは、勉強をするために学校に入ったにもかかわらず、学徒動員や勤労動員などで強制的に働かされ、十分な学習の時間はありませんでした。



牛を利用して田を耕す平戸高等女学校の生徒(平戸高等女学校卒業アルバム)

学生たちも労働力に

太平洋戦争末期になると、深刻な労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒が軍需産業や食料生産に動員されるようになりました。平戸の学校からも多くの学生たちが動員され働きました。

学生も戦争のための労働力に

中学猶興館の3年生から5年生は三菱長崎造船所、潜龍炭鉱、中里炭鉱などで強制的に働かされました。三菱長崎造船所では、爆薬を積んで米軍艦船に突撃する特攻艇の製造が行われていました。

動員先での食事は、大豆の搾りかすに少しの米を混ぜたもので、お腹を壊す生徒もいたようです。学生たちはシラミ・ノミなどがわく劣悪な居住・衛生環境の中で長時間の過酷な労働を強いられました。

学徒動員は、長崎県立平戸高等女学校の生徒も例外ではありませんでした。学生たちは魚雷の製造が行われていた川棚海軍工廠で働かされました。「神風」と書かれた鉢巻きを締め、油まみれになりながら魚雷の部品を作りました。なかには、動員されてから1度も教室に戻ることなく卒業した生徒もおり、卒業式は学校ではなく、川棚海軍工廠本部前で行われました。

被ばくを逃れた中学猶興館の生徒たち

昭和20年8月1日、三菱長崎造船

戦争を知らない世代へ

戦後70年以上が経過し、戦争を経験した人たちの高齢化は進んでいます。当時のことを語る人は年々減少し続けています。戦争経験者の話に耳を傾け、語り継いでいかなければなりません。



猶興館高校で講話をする長嶋さん。

す。また、最近では修学旅行で沖縄に行っているということもあり、母校の戦争の歴史を知ること、沖縄での学びも変わってくるのではないかと思います。

生徒の皆さんには、戦時中に学徒動員などで満足に勉強できなかった人たちがいるということを知り、平和であるからこそ勉強することができるといふことを知ってほしいと思います。また、戦争体験者の話を聞き、語り継いでいってほしいと思います。

今後も依頼があれば、講話をとおして猶興館高校の歴史とともに戦争の歴史について伝え続けていきます。

市内に残る戦争の跡

田平天主堂



田平天主堂前庭の教会に向かって右側のレンガ塀に米軍機の機銃掃射の弾丸の跡が残っています。この機銃掃射で2人が命を落としています。

御崎砲台跡



対馬海峡防備のため、旧日本陸軍により設置された「吉岐要塞」の一角をなす砲台。現在も見張り所跡や倉庫跡が残っています。

平戸地区戦没者慰霊顕彰之碑



日中戦争や太平洋戦争の平戸地区の戦没者の慰霊碑。慰霊碑は市内各地区にあり、慰霊祭が行われています。



もり こうえい
森 光榮さん
(下中野町)

「恐ろしい体験というのはいつまでも心に残ってしまう」

私が物心がついたころには、すでに太平洋戦争も末期でした。当時何度も恐ろしい体験をしましたが、それら出来事は今でもはっきりと覚えています。

昭和19年2月ごろ、親戚の女の子が亡くなったので、葬儀のためにその子の家に行ったときのことです。その家からは海が見渡せるのですが、はるか彼方に大きな船が進んでいるが見えていて、大人たちは輸送船ではないかと話していました。まもなくして、ドーンというものすごい音とともに大きな水柱が上がったかと思うと、見えていたはずの船が跡形もなく消えていました。大人たちは「米軍の魚雷か潜水艦にやられたのだろう」と話しており、その時の光

景は忘れることができません。また、米軍機に狙われたこともあります。1度でなく3度もです。1度目は祖母と弟といたところを狙われました。とつぎに近くの藪に隠れたため難を逃れましたが、米軍機の撃った弾の葉きょうの臭いは今でも忘れることができません。

後の2回は友達と畑で遊んでいるときでした。米軍機は米兵の顔がはっきりわかるほどの低空飛行で飛んできました。日ごろから、米軍機に狙われた時は地面に伏せるように教えられていたので、その通りにして弾に当たらずに済みましたが、恐怖のあまり地面にはいつくばって泣いたのを覚えています。

友人たちにも私と同じように恐ろしい経験をした人がおり、大人になっても「よくあの時死ななかつたな」と話すことがありました。

この経験は、私が4歳から5歳くらいまでの時のものです。恐ろしい体験というのはいつまでたつても忘れることができず心に残ります。今でも、米軍機に狙われた場所の近くを通ると「あの時死んでしまっていたら今の自分はいないんだ」と考えることがあります。戦争はしてはいけない。強くそう思います。



ながしま まさひこ
長嶋 正彦さん
(田平町)

「平和だからこそ勉強できることに感謝して」

私は、猶興館高校の卒業生ということや母校で社会科の教師をしていたということもあり、毎年新入生に対して、「猶興学」と題して講話をしています。猶興館高校の創立から現在に至る140年の歴史や「猶興館」という校名の由来と意味などについて話しています。

その中で、猶興館高校がぐり抜けてきた戦争との関わりについても話しています。猶興館高校は長い歴史の中で、日清戦争や日露戦争、太平洋戦争など多くの戦争を経験しています。そのような中で先輩たちがどのような状況に置かれていたのか、どのようなような生活をしていただのかということは、猶興館高校の歴史を学ぶ上で欠かせないものとなっています。

身近なところから平和をつなぐ

戦争体験者の高齢化が進み、当時のことを語る人が少なくなっている。これからは語り手が少なくなっていくでしょう。語る人がいなくなれば、当時のことを知るには、書籍や写真などに頼るしかありません。

だからこそ、今、戦時中を生き残った人たちの話を聞き、自分の次の世代、さらにはその次の世代へと語り継いでいかなければなりません。戦争の被害者にならないために、私たち一人一人が歴史を学び、平和をつなぐという想いを持つことが必要です。

終戦から75回目の夏、ふるさとから平和について考えてみませんか。身近なところで起こった事実を知り、次の世代へと伝えていくことが、平和をつないでいくための一歩になるのではないのでしょうか。

